

M. M. ルウィン先生を思う

経済学部長 金 栄 緑

経済学部教授 M. M. ルウィン先生は、平成 29 年 3 月をもって定年退職されました。熊本学園大学経済学会は、先生の長年にわたる熊本学園大学および経済学部に対するご貢献に感謝の意を表して『経済論集』の退職記念号を発刊することになりました。ルウィン先生退職記念号におきまして、多くの先生々から玉稿を賜り、厚く御礼申し上げます。

ルウィン先生は、1969 年ミャンマーのラングーン経済大学（現ヤンゴン経済大学、Yangon University of Economics）を卒業、1971 年からは同大学の講師になられ、1976 年に同大学大学院修士課程に進学されました。1979 年、日本の文部省（現・文部科学省）の国費招聘留学生として来日、名古屋大学経済研究科博士課程に進学されました。1984 年、開発経済学専攻の博士号（経済学）を取得後、名古屋大学客員研究員を経て 1993 年、熊本商科大学（現・熊本学園大学）経済学部の教授として赴任されました。

ルウィン先生の経歴を辿っていきますと、幾つかの重要なターニングポイントに偶然ではない一種の必然性のようなものを感じます。それは祖国ミャンマーの変革です。ルウィン先生が生まれたのは、ビルマ（現ミャンマー）の建国の父と呼ばれるアウン・サン将軍が暗殺された 1947 年 7 月 19 日から 2 週間後の 8 月 2 日です。先生が大志を抱き大学に進学された 1965 年は、1962 年に発生した軍事クーデターにより誕生した社会主義の軍事政権に対する反政府活動が活発になった時期であります。

経済に精通している専門家のいない軍事政権による経済政策に失望されたことから、大学院修士課程に進学、課程を修了されたのはビルマ連邦社会主義共和国憲法が制定され（1974 年）、社会主義共和国が誕生した頃です。以後、軍事独裁政権による政治、経済政策の失敗などが深刻になる 1979 年、ルウィン先生は日本国費留学生に選抜され来日したのです。先生の元々の留学予定は、イギリスだったようですが、日本への留学は突然の通知であり、私たちとの縁の始まりでもありました。祖国ミャンマーで発生したいわゆる「8888 民衆化運動」は、ルウィン先生の日本への定住のきっかけとなります。

熊本学園大学経済学部には在職中のルウィン先生は、研究、教育、教学といった、大学の教員に求められている業務に精力的に取り組んでおられたと記憶しております。とくに、学生の指導と教育の面では、経済学部一番の実績を残しておられたと思います。学部のゼミにおいては、

発展途上国の理論の学習とともに実践的な活動をセットにした今日の大学教育に求められている「問題発見・解決（PBL）」や「アクティブラーニング」などを先駆的に実践してこられました。また、若手研究者の育成にも誰よりも熱心で、大学院でも優秀なゼミ生を輩出、多数の弟子が大学などで研究者として活躍しています。

ルウィン先生のおおらかな人柄、強力な実行力などから、大学や学部の国際関係、国際研究体制の構築には、大きな業績を残されました。大学間の協定などにも積極的に取り組んでおられましたが、その背景には「研究と教育による経済の成長」があったと思います。真の開発経済は、教育による人の成長による結果であるとの考えでした。カンボジアの大学との連携、研究所の設立、研究会の開催、カンボジアの村の支援はお金ではなく井戸を掘る、孤児院や小学校の支援などは、近視眼的な成果を求めるのではなく、長期的な、根本的な変革によって、カンボジアの成長につながることを考えてのことだと思います。

私事になりますが、ルウィン先生には、私が赴任した頃から研究や教育を含め多岐にわたってご指導を受けたり、一緒に仕事をさせていただいたりしました。私が今、経済学部長という重責を伴う仕事を務めることができるのも、ルウィン先生から教わった多くのことがあるからであり、感謝しています。

“定年後は、故国に帰り、ミャンマーの教育と発展のために努めたい”と口癖のように語っておられたことを有言実行で示すように、2018 年 3 月のご退職とともに、祖国ミャンマーに戻られました。

ミャンマーの総選挙でアウン・サン・スーチーさんが率いる国民民主連盟党が圧勝、ミャンマーに春が到来したのはルウィン先生が退職される 2 年前、2016 年のことでした。